

変化，対比に着目した文学的文章の読み解き方

三 根 直 美

中学校2年生の定番教材である「夏の葬列」(山川方夫)「走れメロス」(太宰治)を取り上げて、何に着目することにより読み解けるのかを検証した。生徒にとって両者とも初読の時はストーリー展開や大げさな表現に意識がいきまわり、単純な話と受け取られがちである。しかし、登場人物の心情や考えの変化、情景描写の変化、人物形容の変化、登場人物間の対比、心象風景などに着目したところ、人間の変容を表現した話であることが理解できた。文学的文章を深く読み解く際に、変化・対比に着目することは有効であった。さらに、初読と学習後の振り返りをさせるワークシートも、生徒に読み解き方を認識させていくのに有効な方法である。

1 はじめに

中学校で扱う文学的文章が少ないことは随分前から実感していた。超定番のものに加えて現代の作家(村上春樹、浅田次郎、重松清、あさのあつこ、小川洋子、江國香織、森絵都など)の作品がいくつか見られるだけで、生徒の好む小説(同世代の若者が主人公で、結末がハッピーエンドのもの)との乖離が感じられる編成となっているし、そもそも出会う数自体が説明的文章に比べて少ない。今年度、中学校2年生を担当したところ、文学的文章に関する読解力が説明的文章に関するそれより低下していると感じられた。文学的文章にどう出会わせていくことが、何に着目していくことが読解力を上げていくことにつながっていくのだろうか。

安藤(2012)は、

たとえ「文学」の概念がいかに変容しようとも、小説を一個の表現機構として 言葉の構造体として 読み解いていくトレーニングは、今後も教育現場の不易の課題として残り続けるにちがいない。¹⁾と言う。すぐれた文学的文章を読んだ時、人間は美しい確かな表現に感銘を受けたり、さらにまた人間の奥深い真理を巧みに表現されていることに感動するだろう。それらを追及していく、その表現機構を読み解いていくことは、自分の感銘、感動を解き明かしていくことに繋がっていく。それこそが文学教育の目指すべきところではないか。

中2の二学期「クリスマスの仕事」(田口ランディ)の実践から、読みの方法として生徒に意識させていくこととして、

変化(心情、考え、感じ方、関係性など)に着目する。
対比することで、叙述の関連や描写の意味を見つける。

を導き出した。²⁾

その後実践した超定番教材二つを取り上げて、さらに検証してみた。

2 「夏の葬列」(山川方夫)の場合

1988年版の教育出版「中学国語3」が初出のもので、以降40年近く掲載されている。現在本校で使用している教科書(学校図書・東京書籍)には入っていなかったため、印刷したもので取り上げた。

一読後、印象に残ったところ 工夫されているところ 感想の3項目を記入させた。

日常ではあまり出会わない文学作品だという印象を受けたようで、

- ・普通使わない語を使って、様々な意味を込めた文があるのが興味深かった。
- ・文学=バッドエンドだけど、ハッピーエンドの方が読み終わった時の気持ちが良い。工夫がたくさんあって、つながっていたのが文学的。
- ・情景描写が多い。色がたくさん使われている。
- ・様々な物事で現在と過去をつなげているのはおもしろいと思った。(下線部は著者による。)

などの感想が挙がっていた。ここで注目すべきは、文学の捉え方である。バッドエンドという言い方は最近の生徒がよく使う言葉だが、文学作品は暗くて

重い内容を扱っているという認識があるのだろうか。さらにハッピーエンドの小説が好まれていることもわかる。また構成や言葉遣い、情景描写など多くの工夫が見られるのが文学であるという認識を持っていることも分かる。自分たちが常日頃使用する言葉であっても、この文脈、この意味では使わないということに気が付けば文学教育をする意味がある。

文章の展開

授業で確認したところは、文章構成である。時間の順序が1 現在 - 2 過去 - 3 現在・過去 - 4 現在 - 5 現在となっているが、時間の流れを入れ替えているのはどんな効果を引き出しているのかを考えさせた。現在目の前で繰り広げられている葬列が過去のあの忌まわしい記憶の中の葬列を主人公に回想させるきっかけとなる。さらに現在の葬列はヒロ子さんの母の葬列であった事実が判明していく「偶然の皮肉」。事実が分かったことで、最初に見た葬列は彼にとって全く違うものとして降りかかってくるようになった。

情景描写

忌まわしいあの夏の体験の場所でもあり、夏の風景でもあった「芋畑」を隣同士のペアでチェックし、気付きを挙げさせた。文中に出てくる箇所は以下の通り。

- 1 「青々とした葉を波立たせた広い芋畑」
- 2 「濃緑の葉を重ねた一面の芋畑」
「芋畑は、真っ青な波を重ねた海みたい～躍り込んだ。」
「芋のつるが足にからむ柔らかい緑の海の中」
- 3 「芋畑の間を縫って」
- 4 「芋の葉を白く裏返して風が渡っていく。」
- 5 「子どもたちは芋畑の中に躍り込む」「風が騒ぎ、芋の葉のにおいがする。」「海の音が耳に戻ってくる」

夏に青々とした緑の葉っぱが一面に広がる芋畑は壮大で、風に吹かれて揺れるそれはまるで海にも見える。子供達が元気いっぱい遊ぶ動作を、勢いよく海に飛び込むイメージで「躍り込む」という表現が繰り返される。さらに「白く」という表現からヒロ子さんの白いワンピースを連想させ、ある予感の前兆ともなっている。また、視覚や触覚を中心に働かせていた部分が、彼が心の変化を迎えた時、初めて嗅覚、聴覚が働くという展開にもなっている。

描写の繰り返し、その中での変化、感覚の変化に着目していく授業展開をした。

比喩表現

アメリカ軍の艦載機を「大きな石」と喩えているのは、突然の襲撃で何ものなのかわからない不気味さ、無機質な凶暴さを表している。さらにヒロ子さんの身体を「大きく白い物」「柔らかい重い物」と喩えることで、仲良しだったヒロ子さんを人間としてではなく、敵の絶好の目標となる白いワンピースを着ただけの物体、自分にとって死を意味する邪魔なものとしか認識できない主人公の気持ちを表している。「強烈な衝撃と轟音」の後、主人公に突き飛ばされたヒロ子さんを「まるでゴムまりのように弾んで空中に浮くのを見た」と表現し、ここでも人間としてではなく、物体としてのヒロ子さんしか主人公の目には映っていない事が分かる。

また、二人の死を「二つになった沈黙」と喩えている。死んだ二人は存在自体はこの世にはもうなく永遠に黙ったままだけれども、心の中には言いたいことがずっとあり、その意識は主人公を捉えて離さないでいる状態が表現されている。

人称表現

「彼」…文中で一番多く使用されている。作者が距離を置いて主人公を表現している。

「俺」…大人になった主人公の心中語の中で使用されている。

「ぼく」…幼い頃の主人公の心中語の中で使用されている。

同じ人物を違う人称表現で表現していることは、教師側から出す必要がある。積み重ねていくと、着眼点として身につけていくはずだ。

人物形容

「ませた目をした男の子」が答えた内容は、葬列の女性の死の原因は以前から気が違って、一昨日、川に飛び込んで自殺したということだ。ませた少年なら、こういう大人たちが好んで喋るゴシップ的な話題には耳ざといだらう。

「はなを垂らした子」は、おばあさんが気が違っていたのは、一人きりの女の子を戦時中機銃で撃たれて亡くしてからだと主人公に止めを刺す役目だ。「はなを垂らした子」は今ではほとんど見られないが、垂らしているのを気にせずにいる子供であるとすると、割と考えなしに平気でものを言う人物形容だと考えられる。

例えば、高2で学習する「こころ」(夏目漱石)には「何も知らない奥さん」「何も知らないK」「正直な私」「卑怯な私」などの表現が多く出てくる。

連体修飾語・短い連体修飾節 + 主体は、～であ

る という構文は、書き手は書く時点における、書く対象としての主体に対する既成認識を示すものとしてある。それは、書き手の、対象としての主体に対する基盤認識としてその人物を記述する推進力となる。それゆえ、物語内容の要素や細部を導く力として物語内容に深く関してくる。³⁾

とあるように、重要な描写として注目すべき点である。

主人公の内面変化

ヒロ子さんとヒロ子さんのお母さんの二人の死は自分が原因だったという事がわかった後、「もはや逃げ場所はないのだ」という意識が、彼の足どりをひどく確実なものにしていた。」という結末で小説は閉じられる。一番理解がしにくい部分である。

過去の過失から逃れようとしていた主人公が、二つの沈黙を目の前にして「もはや逃げ場所はないのだ」とそれを受け入れた時から、彼の生きることは始まったと言ってよい。初めて「確実な足どり」で歩み出したのである。いかなる不安や罪が彼をさいなんでも、彼にはそこから出発する以外にないという確かな地点があったと言える。⁴⁾

この部分は、「人生が持つはかなさ」「人間が生きることの重み」を感じさせる表現であるとも書かれている。普通、自分は殺人を犯していなかったのだと知ってうきうきした主人公が、実は二人の死に自分は関わっていたのだと気が付いた後の足どりは、「重いもの」「緩慢なもの」などが入ると予想されるが、なぜ「確実な」が入るかを議論していくと面白いだろう。実際の授業ではほとんど時間がなくて何人かの意見でまとめてしまったが、話し合っていく問題として設定すべきであろう。[]で空欄にして生徒に本文を提示する手もある。

ここまで様々な表現上の工夫が見られる短編小説に生徒は出会ったことがなかったようで、これほど小説家は考えて文章を書いているのかと驚いていた。山川方夫は若くして死んでしまい、作品は少ないが、この小説はストーリーの意外性、短編であること、表現の意外性、結末の難解さ、人称表現の変化など、中学生に授業で出会わずには格好の小説教材であると考えられる。

3 「走れメロス」(太宰治)の場合

1955年時枝誠記編「国語・総合編」(中教出版)に掲載されて以来、62年もの間取り上げられ続けており、古典的文学教材として定着している。

しかし、何か生徒の実感とかけ離れている感じが

する小説であるのは否めない。

全文音読の後すぐ書かせた『「走れメロス」とは、～話である』は、次のように分かれた。(42人のクラスの内訳)

正義・信実・愛は残虐な心や悪心に打ち勝つという話(18)

友情を通して、自分の命を危機にさらしてまでも人を信じることの大切さを王を伝え、改心させる話(16)

友を身代わりに、自分の欲を果たしたひどい面のあるメロス、ご都合主義な話(2)

人の心の中に存在する善悪の感情の葛藤を描いた話(2)

正直者で単純なメロスが友を人質にして、諦めて裏切ることを考えたが、それを乗り越え友を救い王を改心させた話。(4)

単純に全体のあらすじをまとめた4人を除けば8割の生徒が、信実と友情について言及しており、最初から人間の心の善悪やメロスのひどさを指摘している生徒は1割にすぎなかった。文章中に「信実」「愛と誠」「正義」という言葉が大きさは何度も出てきて「**“熱く信義を語る”この教材は、ある種の“胡散臭さ”を感じさせる**」⁵⁾ものであることは間違いない。

実際の授業展開は、全8時間。

- 1 全文通読後、『「走れメロス」とは、～話である』を100字原稿用紙に書く。
- 2 難語句の意味調べを一人一個させ、意味プリントを完成する。(意味調べは家庭学習、プリント記入は授業中に平行して実施)
- 3 学習課題を一人で考えた後、グループで話し合い発表資料を作成する。教師から出した学習課題は、

王様はなぜ人を殺すのか。その本当の想い、考えは何か。
フィロストラトスを登場させた作者の意図、考えは何か。
メロスのいう「もっと恐ろしく大きいもの」とは何か。
最後の、少女が緋のマントをメロスに捧げる場面はなぜいるのか。
この作品は人間のどんな面がよく描かれていると考えるか。

である。座席の近い者で4～5人のグループを作

り、課題の指示をした。

- 4 発表資料をもとに、学習課題を解決していく。
- 5 メロスの描かれ方を探り、その変化を探る。
- 6 濁流の所を中心に情景描写の特徴を探る。

「走れ！メロス」と言っている主体は誰か、考える。

- 8 あなたの「メロス論」を書き、最初書いた「～話」と比較させて、意見が変化したかどうかプリントに書く。

学習課題の設定を教師側からした理由は、生徒から出た疑問から学習課題を集約していく方法だと時間がかかることと中心的な課題にはなりにくいからだ。実際に与えた学習課題5つは、大きな課題であり、全体を踏まえないとなかなか答えられないものである。様々な叙述を根拠にして考えていくことを期待して学習課題を設定したのだが、最初から与えるのには大きすぎた課題だったようである。特に、と については、生徒の考察だけではかなり不十分だったため、メロスの描かれ方、情景描写を探っていくことを組み入れた。

一読では気付きにくい登場人物の様々な変化に着目すれば、小説の読みが違ってくことは、田口ランディ「クリスマスの仕事」の実践でも明らかになった。

8における生徒の「メロス論」を次に挙げる。

「走れメロス」とは人間の心の闇をよく表しているお話ではないかと思った。

現在における人間関係を風刺した作品である。

正義ぶった人がいろんな欲に負ける話。いろんな想いが交錯する中、最後は自分の命よりも大事なものがあると考えたメロスが自分の信念を貫いた話。

最初は勇者が悪い王を倒すような茶番のような、よくある話だと思っていたけど、色々な出来事が起きて、例えばセリヌンティウスは弟子かと思っていたがメロスの心の弱さを表していたり、王の悪だくみだったりと登場人物が大切な役割をしている、人間の強さと弱さを表している話。

ただのヒーロー物語、典型的に悪と善がはっきりしている物語だと思っていたが、細かくよみとることで結局みんな心が変わってしまっていることに気づいた。

メロスは人間味ある私たちに近い性格を持っている。(中略)多様な感じ方を持った人々のバランスが今の社会のバランスを作っている。「走れメロス」はいつの時代にも通じるものがある。

メロス自身も走ることによって「信実を決して空虚な妄想ではない」ということを証明し、自らの醜い感情から目をそらし、正義感という自分の美しい感情を見たかったのではないかと思った。つまり、メロスが走ることで信実を証明しようとしたのは、人間が自らの暗い感情から正義・信実を探そうと葛藤する人間の心をそのままあらわした物語だと思ふ。

最後に王様が民衆に受け入れられているのが納得いかない。王様に大切な人(家族など)を殺された人もいるのに、それを全て隠してハッピーエンドというのはさすがフィクションという感じがする。

メロスが王城に入ったときは人の心は信じられないと断言していたのに、わずか三日という期間でメロスがぎりぎりにかけてきてセリヌンティウスと抱き合っ泣き出したのを見て信じると言い始めるのもおかしい。

初読と自分の読みが変化したと回答した生徒が42人中33人であった。変化の理由は、メロスの心の声、独白を読んだから、メロスの性格の分析から、メロスの自分との葛藤、自分との闘いに着目したから、情景描写に着目したから、「走れ！メロス」と言っている主体を考えたからが挙がっている。生徒は一読では単純明快なストーリーに引張られているが、何に着目することで文学的文章が読み取れていくのかが、少しずつではあるが体得出来ているのではないだろうか。

メロスと王の変化

自意識の欠如したメロスと自意識過剰に苦しむ王(ディオニス)との“和解”が模索される、ある意味ではきわめて現実主義的な課題に裏打ちされた物語⁶⁾と指摘されるように、メロスと王の変化を中心に見ていく事が大切である。ただ実際の授業では、王の改心のなぞについては触れなかったため、生徒の「メロス論」のように疑問を残したままになってしまった。

王の改心については、次の解釈が参考になろう。

ここでは、信実をそれ信じる故に人を衝き動かすもの、それを求める故に人を走らせ、または待たせるものとしてある。またメロスやセリヌンティウスを信実を体現している人間として見たのではない。信実にあこがれ、信実に引きずられて生きるちっぽけな人間として、王は二人を見たのである。だから、メロスとセリヌンティウスは王の心に勝つ

たのではあるが、王が負けたのはメロスとセリヌンティウスではない。王が仲間にしてほしいといっているのは、そうした「信実」をおそれ、引きずられて生きるしかない人間の、別の言い方で言えば、自分の中に裏切りの気持ちを抱きながらも、それでも人を信じ、その信頼に報いようとする人間の仲間に入れてほしいといっているのであって、信実の心を持ち、人を信じきれぬ強い心を持つ理想的人間の仲間にしてほしいといっているのではないのである。)

生徒の感想にもあったように、人間味あふれた、現代にも通じる人間の姿を見ている。

『走れメロス』にあって猜疑の対局をなすのは友情と信義ではない。他者に信じられている、というその対他的自己のありよう(自己の中で創り上げられる他者の鏡像)が対自的自己(自分で見る自分の混迷を克服し、あらたな行為を獲得していく⁸⁾)のである。

「もっと恐ろしく大きいもの」「わけの分からぬ大きな力」が「信実」であるのは確かなのだが、それがなぜメロスにとってはわけが分からぬものであるのかを解明していくと、人の命より、約束よりも大切なもの、正体は掴めぬものだが、走ることでしかそれは掴めないし、行為し続けるしかない状態であることまで導き出されるとよい。メロスが最初は奢り高ぶった自信満々な人物、偉そうな人物だったが、自分の弱さにぶつかった後すべての邪念がなくなり、つき動かされて走り続けるのが「もっと恐ろしく大きいもの」「わけの分からぬ大きな力」によってであるのだ。今までこの流れで押さえたことがなかったのだが、変化で捉えていくと「走れメロス」の読みが変わっていく流れとなった。

メロスの走る目的が最初は、「殺されるため」「伴を救うため」「王の奸佞邪知を打ち破るため」だったのが、「その男のためにわたしは、こんなに走っているのだ。「信じられているから」「もっと恐ろしく大きいもののために」と変化する。

「...られている」「...されている」というリフレインはここで重要な意味を持っており、こうした受動的な強迫観念が、まさにその暴力性ゆえにこそ当人を味わう自意識の混迷から解放し、行為のエネルギーの獲得につながっていくことの可能性が、ここで「信」の一字に託されているのである。⁹⁾

叙述からも、メロスの心理状態を押さえていくのに格好の場所である。

情景描写

濁流の場面を中心に押さえた。

- ・倒置法 見よ、前方の川を。
- ・擬人法 百匹の大蛇のように、メロスの叫びをせせら笑うごとく
- ・直喩 馬のように
- ・動詞の積み重ね のみ、巻き、あおり立て、...消えていく。押し寄せ渦巻き引きずる流れを
- ・漢語の使用 獅子奮迅、愛と誠の偉大な力
- ・擬態語 とうとうと どうとうと ざんぶと
- ・文末 見えない。なっている。消えていく。現在形を間に入れて臨場感を出している

また、

- ・斜陽は赤い光を木々の葉に投じ、葉も枝も燃えるばかりに輝いている。
- ・塔楼は、夕日をうけてきらきら光っている。
- ・メロスは胸の張り裂ける思いで、赤く大きい夕日ばかりを見つめていた。
- ・且は、ゆらゆら地平線に没し、まさに最後の一片の残光も、消えようとした時、...

の4箇所は、再び走り出したメロスの心が走る中で生き生きと希望に燃えていることを太陽が象徴している。メロスは間に合うかもしれないという期待も感じられる部分である。「心象風景」として学習する初めての部分である。

人称表現

固有名詞の「メロス」が最後には普通名詞の「勇者」に変化する。少女が与えた緋のマントと合わせて、初めて一人の単純な男が、人々から賞賛される勇者として一般化されたことを意味し、さらには初めて自分の外見に気が付くという場面であり、緊張感を緩ませる役割も担っている。

また「走れ!メロス。」「逃げ、メロス。」と言っている主体は誰なのか考えると、語り手 読者メロス自身が挙げられる。

語り手が、外からの語りをしていたのに、直接メロスへの呼びかけとなり、同化していく過程が分かる。

人物形容

メロスの形容

- ・メロスは、単純な男であった。
- ・邪悪に対して人一倍敏感な男
- ・持ちまへののんきさ

・若いメロスは、つらかった。

・正直な男

王の形容

・暴君ディオニス

・口では、どんな清らかなことでも言える。

・人は、これだから信じられぬと、わしは悲しい顔をして...

・王の顔は蒼白で、眉間のしわは、刻み込まれたように深かった。

内省の欠如した、あまりにも素朴すぎる“正しさ”と、一方ではあまりにも屈折した自意識¹⁰⁾

が、メロスと王の対比である。

しかし、メロスは意気消沈した際、「私は王の言うままになっている。」と王に近い自分を自覚する。

きること - 「読むこと」の秘鑰 - 』, 田中実 + 須貝千里編, 教育出版, 2012年, 265 .

4) 浜本純逸・松崎正治編, 『作品別 文学教育実践史事典・第二集 - 中学校・高等学校編 - 』, 明治図書, 1987年, 99 .

5) 注1 . 同. 168 .

6) 注1 . 同. 169 .

7) 佐々木秀穂, 「国語科文学教材研究批評の確立をめざして2 - 『実践国語教育別冊 「走れメロス」の教材研究と全授業記録』を素材として - 』, 『論叢国語教育学(4)』, 広島大学国語教育研究会, 1996年, 39 .

8) 注1 . 同. 180 .

9) 注1 . 同. 180 .

10) 注1 . 同. 175 .

4 成果と課題

「夏の葬列」「走れメロス」ともに、情景描写 人称表現 人物形容 登場人物の心情や考えの変化 登場人物間の対比 について見ていったところ、一読で読み取っていたものとは違う読みが確立されていった。文章全体を通した、叙述の関連や描写の意味などは、なかなか読み取りにくい部分であるため、変化、対比に着目して探っていくことは有効な手段となるはずだ。

また、初読と学習後の振り返りをさせるワークシートも使ったが、自らの読みが初読とどう違ったかを認識させる過程を組み込み、何に着目したことで変わったのかを意識化していくことを積み重ねていけば、文学的文章を読み解く視点が身についていこう。中学校から、そのような観点を持たせた読みをさせていくべきだと考える。

一読してわかる文学的文章ではなく、多くの謎を残しているものこそが教室で読む文学にふさわしい。

今後、別の文学的文章についても、この方法で検証していきたい。

参考・引用文献

1) 安藤宏, 「走れメロス」, 『文学が教育にできること - 「読むこと」の秘鑰 - 』, 田中実 + 須貝千里編, 教育出版, 2012年, 169 .

2) 三根直美, 「田口ランディ 『クリスマスの仕事』の授業提案」, 『国語科研究紀要』48号, 広島大学附属中・高等学校 国語科, 2017年, 26-32 .

3) 小林幸夫, 「既成認識と生成認識 - 夏目漱石『こゝろ』における書くこと」, 『文学が教育にで